

梅雨色小径

「そついえばそついえば。すっかり、しっとり、梅雨になった訳だけれど」

彼女は背後に現れた私の気配を感じ取ったのか、唐突に口にした。そつそつ、最近はずばつかり。ここはね。

「たしかにたしかに。しっかりじっとり、梅雨になったわ。幻想郷もねっとりずっしり、ねずみ色の空は私達を見下ろしている。」

「あら、スキマ」

彼女が振り返る。幻想郷で二番目に傘を差した姿が似合つ妖怪さん。

「こんにちは。お花の妖怪さん」

「一番は……言つまでもないわよね？ ふふふ。」

とにかく、

「梅雨は嫌あねえ」

そつ言つた私に彼女は鋭く、怪訝な顔を向ける。

彼女、風見幽香はもう少し愛想を振りまく練習をしてもいいと思うのだけど。

「梅雨は嫌つて、それはどういつ意味でかしら」

どついつ意味つて、ねえ。洗濯物が乾かないつて藍が不機嫌になったり、庭の雑草が一気に伸びるから手入れが面倒だと藍が不機嫌になったり。するでしょうね。もしも、こちらとあちらの隙間に梅雨があるのなら。

「それはさて置き、最近霊夢が冷たいの」

「そつ」

幽香が気のない返事を寄越す。私と幽香、二人の間には大きな水溜まりがある。水溜まりは濁つて何も写さない。写さないと思つているつちは、何も映らない。のだそつよ。人の心は。

「貴女も冷たいのね」

「そつ」

だから幽香、貴女も私に冷たいのでしょつね。わざとらしく首を傾げられても、仕様がないわ。

いつもの事ですもの。振り続ける雨は私と幽香の傘、それぞれに降り注ぐ。これはかりは平等に降り注ぐ。聞こえるのは雨が傘を叩く音、生い茂つた草花に降り注ぐ音。

「それにしても、梅雨は嫌ねえ」

嫌よね。ほら、ね？ 貴方もそつ思つたでしょつ。

「それは貴女の感性がどうかしているんでしょつ」

けれども、幽香はそつ言う。感性が皆、同じである必要なんてないものね。それにしても酷い言われよう。

「言つじやない」

「私でなくちゃ、言わないでしょつ」

そつねえ、それもそつかしら？ 簡単に認めちゃつのはつまらないけれど。

「それは残念だつたわね。貴方でなくつても、霊夢とか」

「馬鹿言わないで頂戴。何が残念ですって」

言葉とは裏腹に、嫉妬しちゃうくらいの不気味な微笑み。

あまり言いたくないけれど……いえいえ、ならばここで言う必要はないわよね。

「……それにしても」

「嫌かしら？」

私が口を開いただけで、噛み付くように反応する。勿論、能面の様な微笑みを張り付けて。能面って言っても二つの意味で、ね。

「何も言っていないわよ」

「梅雨がそんなに嫌かしら」

幽香は言う。表情のその翳りが雨の下、酷く沈んで見えた。あるいはそれは、私への侮蔑かしら。そんなに嫌、嫌？ そうねえ

「精々貴女の事くらいには」

「嫌いじゃなかったの？」

不躰に言い放つた私の言葉を、彼女は気にもしなかった。幽香が何処かしたり顔なのは気のせい。私も、ほんの少しだけムキになって言ってみる。

「嫌いなよ」

まあ、それが本心かは今はどうでもいいでしょう。どつせ言葉遊びですもの。

「酷いわね」とこぼしてから幽香は僅かに傘を傾ける。

彼女の眼に映る梅雨景色は、私の眼に映る梅雨景色と、如何程に違うのでしょうか。幽香は傾けた傘の先から、少しだけ空を見上げる。そうねえ、それはそれは、大層えらく違う事でしょう。

……視線をこちらに戻してから、幽香が口を開く。

「それなのに、どうして私の所なんかに来たのかしら？」

至極真つ当な問いである。それはもつ。私が忘れてしまつところだったわ。

ふふ、冗談だけれど。

「期待を裏切る様で申し訳ないのだけど、虐めてほしい訳ではないわ」

「それはとても残念」

とても残念そうに見えないのが、不思議ではないわよ？ そう、いつも通り。

「ちょっとばかり、私の気持ち梅雨色だったから、ふわりふわりと眠れなかったのよ」

「……梅雨色、ねえ。それって、どんな色かしら？」

幽香が歩み寄りつつ問いかける。その瞳がしっかりと私を捉えていた。濁った水溜まりも大した深さでは無かったように、接近の障害にはなり得なかった。

「それはもつ、どんよりじつとりモノクロームのお花畑ね。つ、……ほら、丁度今の空模様」

鼻を突き合わせる様な近さまで迫られては、流石にその剣幕に吃驚してしまふ。視線を逸らせようと、私は空を指差してそう言う。けれどもくれども、幽香にとつてはそれが妙に気に入らなかつたようだった。

「もう一度言つたわよ。貴女の感性はどつかしている」

「失礼ね」

「それは貴女よ」

……一応、弁解しておくわ。私といえど、彼女にここまで言われなくてはならない様な事を口にしたつもりはない。少々複雑な気分になりつつ、水溜りに視線をやる。そこには、はつきりくつきり、可愛らしい足跡が残っていた。

しばらく、無言 静謐

「だけれどこつして私のところに来た、っていつ感性だけは褒めてあげる」

よっぽど惨めに見えてしまったか、幽香が情けをかけてくる。悔しいけれども誰かに褒められるなんて、こんな事も、彼女でなくてはあり得ないわね。

「……勿体ないのは貴女に褒められても、少しくらいしが嬉しくないという事ね」

「あら？ 少しは嬉しいのかしら」

「まさか」

まあこれも、本心なんてどうでもいい。それはそれでも、恥ずかし気もなく言つとすれば、霊夢に同じ事を言われたならばそれはもつとびきりに嬉しいと思つわよ？ 私ほ。

閑話休題。雨の匂いが、草の匂いが辺りに充満している。鶯り空、雨のカーテンの下で太陽の畑はともではないけど、タイヨウの畑には見えない。随分と間が空いたような気がしてから幽香が口を開く。

「それでは、行きましょう。スキマ妖怪の八雲紫さん」

そつ呼びかける幽香の目は、幾分柔らかく見えた。何故かってそれも、私の心が寛大だからだけれど。

「拒否権はないのかしら？ オハナ妖怪の風見幽香さん」

「なくはないけれど、行使は出来ない様になっているの」

彼女は笑いながら返答する。いつもならもつと意地悪そつに笑むくせに、今日ばかりは裏がなみみたい。なんだが、観念せざるを得ないみたいね。

「……ふふ。全くその様で」

元からこつなるって、そついつ気はしていたもの。

「それで、何処にいくのかしら？」

「何処って、博麗神社でしょう？」

僅かでも、他人に本心を伝えるべきではない。今そう思った。梅雨が嫌なのは本当、でも霊夢が冷たいのも本当。言ってみるもんじゃないでしょつ？ 特に、この、幽香、なんかに。

嗚呼、けれどもそれが分かつて言っているのだから、質が悪いわ。そう、これが私ですもの。

「……藍に仕事を押し付けるのも悪いわよね」

微塵もそんな事、思っていないわよ？ でもでも、弱みを握られたみたいで少し嫌だったから、ちよつとだけ逃げ出したい。

「……へえ」

「あらあら、幽香、どつかしたの？」

幽香は相変わらず無関心を装っている。けれど、眼の前の美女が余程美味しそうな獲物に見え

るのか、その佇まいに嗜虐的な香りが漂っている。さながら、美女と野獣ね。いやいや、鬼女と美女かしら。ひよっとして　鬼女と野獣？　まさかまさか。

「そうそう、忘れていたのだけれど私。今日、霊夢に呼ばれていたんだっただわ」
空想に耽っていても、逃げ果せる訳ではないでしょうに。」

幽香の言葉が私をそこに連れ戻す。………って、呼ばれてる？　そう、呼ばれている呼ばれている……幽香が。

「そ、そういえば、私も霊夢の所に遊びに行こうと思っていたの」

咄嗟にそんな言葉が口をつく。おかしいわよね。そこは今、一番行きたくない所なのに。幽香が呼ばれているって、それを聞いたら自然と口から出た言葉。どうしてでしょうね？　どうしてかしら。………分かってるつもりでは、いるのだけだね。

「うふふ。とっても、気が合つわね。紫」

「本当ね」

「ふふっ……」

幽香がいつになくご機嫌なのが癪である。もっと癪なのは、いつになくその雰囲気は優しいが、どうしたってというのよ。調子が狂うわ。けれども、もっともっと癪なのは彼女が霊夢に呼ばれている事、よね。全く。

空は飽きる事無く、雨粒を吐き出している。傘の下、幽香は笑みを絶やさない。何とはなしに、その姿を眺める。昔よりは幾らも短いその髪の毛が、湿気のせいかいつもより色っぽく揺らいでいた、気がするだけよね。意識してではないが、幽香と私の歩幅が合う。誰かと並んで歩くと、久し振りに。

「どうしたのかしら、紫？」

熱っぽい目で

「幽香って……本当に、色っぽいわよね……。ねえ？　その髪の毛、触っても、良い……？」
とても言えば、少しは幽香の鼻を明かせるでしょつかね。どうてもいい事だけれど。

と、冗談はさて置き、

「どうしたも、こうしたも、幽香。道はこっちでいいのかしら。」

博麗神社は幻想郷の東の端にある。今私たちの歩いている方が、少なくとも博麗神社に向かっているとは思えない。

「そうよ。どうかしたの？」

「神社とはまるで反対方向じゃないの」

「そんな瑣末事、気にするなら紫、貴方はスキマでも何でも使って先に行けばいいのよ」

ムツとしたが、そうよね。冷静さを欠くのは良くない。ええ、もっと冷静にならなくちゃいけないわ。………とてもじゃないけれど今の私が一人で、博麗神社の霊夢の元へ、行ける訳、無いじゃない。その点、幽香はとても冷静だった。つくづく、いやらしい妖怪だと思っ。誰かの嫌がる事を、何でも知っている。

そう、貴女だけよ。私の事……。

「……もう。黙らないでよ、紫。大丈夫よ。ちゃんと神社まで、怪我せずに着くでしょつかね」
顔を覗き込むようにしてそう語りかけられる。あやされている様でとても居心地が悪い。機嫌

も悪い。本当にどこまでも、意地悪……。

「そうね、私と貴女が、仲違いしなければ」

まあ、私は怪我せずに神社まで辿り着くでしょうけれど

幽香も眉根をピクリとさせて、私の減らず口を歓迎する。そして彼女は、表情を一層にこやかにしてこう言うのだ。

「ふふ、それでも、怪我をするのは貴女だけでしょっけど」

「ふっ……」

まあ予想通りとは言え、ねえ。思わず吹き出してしまふ。幽香の視線が冷やかだけれど。そう、これでもいい通り。

「まあ……いいわ」

幽香はそう言つと、何事もなかったかのように前を向き直つた。気が付けば私たちは、何処だかの森の様な所に出ていた。魔法の森ではない。ああ、けれども来た事はあるわよ。この道は竹林に、迷いの竹林へ伸びているのだから。

なんにせよ、ジメジメと雨模様様の空に負けにくいぐらいの陰鬱さ。こんな小道、この季節には通りたくないわよね。

「わざわざ迷子に行こうつていつのかしらっ」

「……？」 ああ、竹林には行かないから安心しなさい」

お互い傘を差しているものだから、私と幽香、間には微妙な距離が空いている。傘で隠れて横顔しか見えない幽香は、やっぱりいつも通り何を考えているか分からなかった。それにしても、竹林ではない？ 何かこちらに、あったかしら。

その小道、伸びるのは妖怪の山と全く正反対の方向に。気が付かないうちに、確かに竹林ではない方へと足が向かつていた。

ええ、思いだせないのは、それもそうね。

私がそんな事を思つた時、視界が急に開けた。視界は木々に囲まれた陰気な暗闇に慣れきつていたからか真つ白に眩しくて、今の景色を碌々写さない。代わりに、とある芳香が鼻をくすぐる。

ディオリツシモ？ うっん。ここにはもっと生氣がある。ふふ、同じくらい、死気もある。

生々しい鈴蘭の香りを浴びた所で、視界の真白が鈴蘭畑の姿であつたと気が付く。ちよつと大袈裟だけれど。

そう、ここは無名の丘。名前を思い出せないのは、それもそう。気が付くと幽香は既に鈴蘭だらけの畑の中にいた。

「ここで貴方の感性をリセットしましよつ。真つ白な、鈴蘭の花を手」

彼女はしゃがんで、その中の一つを手にする。両手でそつと。肩に挟んだ傘は傾いて、雨は容赦なく彼女に降り注ぐ。いつも不思議に思う。あれ程優雅な振りを装つて、けれども花の事になると服が汚れるのだから、身体が雨に打たれる事だつて気にしない。

丁寧に取り上げて、目の高さまで掲げる。

両手で大切そうに、満面の笑みで。

「ボサツと突つ立つてないで、紫、貴女もこつちに来なさいよ」

見とれていたのかも知れない。そうそう、急だけれどさっきの話。

あまり言いたくはないけれど……っていうお話。

『あまり言いたくはないけれど、貴方って私に似ているわよね。幽香』って、そう言おうと思つてた。

勿論、口にはしないけど。けれどどうやらそれは、気のせいね。

貴方は、私に絶対ないものを持っている。だから私は今の貴女に見とれてしまったのでしよう。

「コンパ口、コンパ口……って貴方は」

「あら、お人形さん。ちょっとだけ鈴蘭、貰っていくわよ」

何やら、場の空気も何も気にしない様なのが飛んできた。あらそう、人形なのね。毒の。

「えー、うーん……あ、そうか。時々、誰か来ると思つたら」

「そうよ。ね？ 今日五月一日……でも、ふーん。その様子だと、攻撃しなかつたの？ 偉

いわね」

「まあー、今はスーさんの偉大さを知らしめるのが先というか　そんな格好じゃ、風邪ひくわよっ」

人形らしいその妖怪が幽香の元へ近寄り、自分が差している傘で幽香を覆う。お人形さんの体軀に合わせた大きなものだから、あんまり雨は防げない。けれども……そんな様子を見ていたら、益々幽香と私の間の溝が開いてしまったように思えた。溝って言つても、別に仲が悪いつもりはないわよ？　こればかりは、本当。

「ありがとっ。助かつたわ」

幽香が極力手を使わずに、自らの傘を器用に差し直して立ち上がる。ええ。未だ鈴蘭は、彼女の両手に包まれている。足に跳ねた泥も、服に跳ねた泥だって拭おうとすらしない。雨水に打たれて髪の毛は顔に張り付いている。

兎に角、どうしてだか私はそんな彼女を直視出来なくて、ちらりと見てから、目を逸らしてしまつた。

「大した事じゃないわ。貴方ほどスーさんを大切にしてくれる人もいないし」

「鈴蘭に限つた事じゃないわ。　つと、それじゃまたね。今度鈴蘭で何か面白い事をするなら、教えて頂戴」

「勿論勿論　じゃあね。……コンパ口、コンパ口、毒よ集まれー」

お人形さんはちよこつと手を振って、すぐにあちらへと飛んで行ってしまった。

「もう、紫。何でこつちに来ないのよ。そんなに鈴蘭の毒が怖いのかしらっ」

幽香がこちらへと戻つて来る。

「え、ええ。そんなところよ」

まさか。

「随分と適当だ事。まあいいわ。はい。この花を」

「この花を」

両手を差しだして、鈴蘭の花を私に渡そうとする。この花を。　どうするのよ。私も做つて両手を差し出した。私は幽香ほど器用に傘を扱えないみたい。傘が傾いて、頬が濡れる。

「何色に見えるかしらっ」

「それは……白色でしょっ」

幽香は満足そうに笑みを浮かべた。

「ふふふ、そう。貴女の梅雨色は白から始まる。さ、何色になるかしらね？ それじゃ、それは霊夢へのプレゼントにする事」

「な、何でもよ」

思わず、口をついた言葉に余裕はなかった。心に余裕がたっぷりある分、こつこつ事も、間々ある。

「何たって今日はミュゲ・デー。幸せ運ぶ、鈴蘭の日ですから」

「……ねえ幽香。私たち、さつきこの道通ったかしら……？」

無名の丘を後にして、また森の小道へと引き返す。けれども、その風景に、覚えがなかった。

「そつよ。ここからは一本道だから、迷い様がないじゃない」

「それじゃ、質問を変えましょう。貴女、何か……した？」

知らぬ間に、記憶が書き換えられてしまったのだろうか。それとも毒がまわったのか。またも、嘩然と立ち止まってしまふ。幽香が何か言いたすかと思っただけで、彼女は黙ったままだった。何かを口にする代わりに、能面のようにでいて何処か人味のある微笑みを返す。

恐らく、能面のようにでまるで人味なんてない私の微笑みに向けて。

幽香の笑みの示す答えは、恐らく、ノー。木々に囲まれた陰気な暗闇、ですって？ 誰がそんな事言っただのかしら。私？ 私……よね。

「さ、紫。行きましょう」

「……そつね」

ゆっくりと歩み始める。

さつきと違つのは、私が幽香の後を歩いている事。

けれどもそれは、丁度いい。

キョロキョロあたりを見回す様子を、見られないで済むのだから。

「私ね、思つたよ。梅雨色って、すつこく落ち着かないの。けれども、目映くて、色取り取り。ちよつと移り気で高慢かもしれない」

幽香がふと立ち止まる。私もそれに合わせて立ち止まる。

幽香はゆっくりと、こちらを振り返つた。

「綺麗なお花が沢山見れるからってだけじゃない。人の心も、花の色だって、色鮮やか。ね？ 今なら紫も見えるでしょう？」

だから私は、梅雨が好き

ええ、見えるわよ。小道の両脇には、沢山の紫陽花が咲き誇って私たちを照らしてた。何れも蒲が杜若。こんなに派手な花でも、ちよこんと咲かれたら分らないじゃない。足元には、コロコロとしたヘビイチゴ。紅の眩しいクマイチゴ。躑躅はラッパを吹く様にこちらを向いていて、それにそれに、無名の丘には純白の鈴蘭たち。

さつきまで、どんよりとしたねずみ色が、梅雨の全てだと思つてた。

暗く沈んだモノクロが、梅雨の事だと思つてた。

なのに、今は……。

「ふふっ……私も毒にやられたのかしら」

「毒も少量なら薬、とはよく言ったものね。……まあ、結局は心なのよ。心」

二人して微笑み合う。

幽香の視線を追ってみると、さっきの菖蒲が杜若か、まあ幽香には見分けが付くのでしょうか。やっぱり、何れ菖蒲か杜若、なんでしょね、私たち。うふふ。

幽香を追い越して、歩み始める。けれどもゆっくり、歩み続ける。

幽香と他愛ない事を話していた。正直、内容はあまり覚えていない。石段を登るなんてとても久しぶりで、それどころじゃなかったからかしら。

鳥居の下。気が付いたら、後に幽香はいなかった。勿論、前にもいなかった。何だか、今日は一日幽香にしてやられた様と思う。たまには、いいかもね。神社の周りにも沢山の紫陽花。沢山の梅雨色。いつもは気にも、しなかった癖に。

「……あ、紫……」

「あら、霊夢」

丁度、霊夢が境内の掃き掃除をしている所に出くわした様子。しばらく沈黙。少し、気まずい。

「ねえ、紫」

「な、何かしら？ 霊夢」

「もう雨、止んでる」

両手の中の鈴蘭に、私の周りの梅雨色に夢中でそんな事にも気が付かなかった。けれども、見栄を張る。

「ふふ。雨が降っていなくなったって、傘は差してもいいのよ」

「そ、そうね。太陽も出てきたし……って鈴蘭じゃない。どっしたのっ」

霊夢が目敏く、鈴蘭に気が付いた。目敏くも何も、両手で持っていたら、それはそれは目立つでしょうけど。

「今日は鈴蘭の日ですもの。貴女の為に、よ」

霊夢の顔が、日に当たってか、紅潮した様に見えた。もちろん、そんな気がするだけだけれど。

「……………本当にっ」

「他に誰かいるかしらっ」

貰う相手はいたけれど、渡す相手なんて……ねえ。そう何人も、いるわけないじゃない。

ミユゲ・デー、鈴蘭の日は大切な人に鈴蘭を送る日。鈴蘭と一緒に幸せを送る日。

「……ありがとう、紫。……お茶、いるっ」

「淹れてくれるというなら、是非」

いつものように、縁側へ。いつもと違ったのは、私が鳥居をくぐってきた事ぐらい。それぐらい。いつものようにお茶を淹れてもらって、口にする。でもでも、よく考えたらちよっとだけ久しぶり振り。霊夢が一度部屋に戻って、花瓶を持ってきた。そこに鈴蘭が飾られる。白く可憐な姿に滴る雨粒だった水滴が、キラリと太陽を跳ね返した。

思わず霊夢の方を見てみたら、彼女も同じで、私の方をちらりと見つめた。

おかしくなって、二人して笑いだす。

梅雨は人の心も、花の色だって、色鮮やか。

……冷たくなって、ちっともないじゃないの。

私と霊夢の腰掛けた目の前には大きな水溜まりがある。それは濁っていたけれど……。

『写さないと思っているうちは、何も映らない。のだそつよ、人の心は』

……ふふ、自分で考えた言葉なのにねえ。やっぱりうっかり、結局は心、なのかしら。

「……それにしても、梅雨は嫌よね」

ふと、思いついたように、霊夢が湯呑手にして、そう呟く。たしかに、霊夢には晴れの方が似合つかもしれない。けれどもあれども、

「ふふふ、それは霊夢。貴女の感性がどうかしているから、よ。……ふふっ」

何処かから笑い声が聞こえた気がして、周りを見回す。けれども、そこには怪訝な顔をした一人の私にとって大切な人がいるだけ。

灰色黒色だった梅雨色は、目覚めて白に、白色に。そうして紫陽花の花が如く色取り取りに、鮮やかに。色は移ろい行き行き、さてさて、雨が止んだら、何色になるのでしょうか

これまた私にとって、仮にも、大切な誰かさんの、そんな言葉が聞こえた気がした。

梅雨色小径　Colorful Path